

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む (5)

阿部 聖

Introduction of the Diary of Air-raid in Toyohashi Area during the Pacific War Written by Uzuhiko Toyota, Part5

Sei Abe

要約：本稿は、前号に引き続き『豊橋地方空襲日誌』第二冊の2月1日から第三冊の2月14日までを対象とする。2月からはテナン島に313航空団が進出して73航空団とともに日本本土爆撃作戦等に参加するようになった。2月16日からは米軍による硫黄島への総攻撃が開始されるが、対象時期はその準備が進められる時期でもある。主に313航空団によるトラック諸島への爆撃や太平洋上の日本艦船の探索が行われた。今回もまたB-29による爆撃作戦、気象観測爆撃機、そして写真偵察機の動向等に関する米軍資料および日本側資料により日誌の記述を裏付けていく。

キーワード：大規模爆撃、気象観測爆撃機、写真偵察機、作戦任務報告書、作戦要約

<前号より続く>

〔解説〕サイパン島の第73航空団による対日戦略爆撃は、中島飛行機武蔵製作所と三菱重工業名古屋航空機製作所および同発動機製作所をおもな目標として、航空機工場へのいわゆる高高度精密爆撃として始まった。もちろんこの間に東京、名古屋の市街地や港湾も攻撃目標となった。また、1945年1月19日には東京と名古屋以外では初めて川崎航空機明石工場が爆撃された。

第21爆撃機集団の指揮官は、1月20日をもってハンセルからルメイに交代した。これによって爆撃方針にすぐに変化が見られたわけではなかった。夜間の低高度焼夷弾爆撃へと大きく舵を切っていくことになるのは3月以降のことである。この間の大きな変化としては、テナン島北飛行場に第313航空団が進出して、2月4日の神戸市街地爆撃から参加したこと、グアム島北飛行場には第314航空団が進出して、2月25日の東京市街地

爆撃から参加したことである。マリアナ諸島の第21爆撃機集団の戦力は着実に増強され、1回の爆撃作戦に参加するB-29の数は大きく増加した。

硫黄島作戦が近づくと、第21爆撃機集団は、1944年12月～1945年1月のB-29による硫黄島飛行場等へ爆撃に続いて、トラック諸島の日本軍施設への4回の爆撃、周辺海域の敵哨戒艇探索(3回)、硫黄島高射砲陣地への爆撃(1回)を実施した。また、第5艦隊第58機動部隊は、空母、戦艦、巡洋艦、駆逐艦からなる5つの任務群に分かれて、2月10日から硫黄島作戦の支援作戦を展開した。すなわち、硫黄島作戦に先立って太平洋上において牽制活動を展開するとともに、16日と17日には日本軍の航空機を破壊し対空砲火を減ずるために、東京および周辺飛行場等の施設に対する一連の艦載機攻撃を行った¹⁾。

この硫黄島作戦は、B-29による日本本土爆撃作戦上大きな障害となっていた硫黄島の奪取と、

1) S.E. Morison(1960), *Victory in the Pacific 1945, History of United States Naval Operations in World War II*, Vol.14, Univ. of Illinois Press, pp.20-25 参照。

それによる B-29 護衛のための戦闘機基地の確保等を目的としていた。硫黄島に対する米軍の総攻撃は 2 月 19 日に開始され、同島ほぼ 1 カ月をかけて制圧された。以上のような諸点を念頭におきながら、前号に引き続き 2 月 1 日以降の日誌を読み進めていく。

日誌の内容に入る前に、1945 年 2 月の B-29 による第 21 爆撃機集団の本土空襲の概要を示して

おきたい。2 月中のマリアナ基地からの B-29 の出撃は作戦任務 No.24 (2 月 4 日) から同 No.39 (2 月 25 日) まで計 14 回である。内訳は第 14 表の通りである。このうち本土の航空機工場または大都市市街地の爆撃は計 5 回で、最初の 4 回は 73 航空団と 313 航空団、二航空団による合同作戦、2 月最後の作戦は 314 航空団を加えて三航空団の合同作戦として行われた。

第 14 表：1945 年 2 月のマリアナ諸島からの出撃日と攻撃目標

月日	作戦番号	主要爆撃目標	航空団 (出撃機数)	備考
2 月 4 日	24	神戸市街地	73・313 (110)	
2 月 8 日	27	トラック-エモン島第 1 飛行場	313 (31)	
2 月 9 日	28	トラック-エモン島第 2 飛行場	313 (30)	
2 月 10 日	29	中島飛行機太田製作所	73・313 (120)	浜松に牽制部隊 2 機
2 月 11 日	30	シーサーチ No.1	313 (9)	敵哨戒艇探索
2 月 12 日	31	硫黄島高射砲陣地	313 (21)	
2 月 12 日	32	シーサーチ No.2	313 (10)	敵哨戒艇探索
2 月 14 日	33	シーサーチ No.3	313 (20)	敵哨戒艇探索
2 月 15 日	34	三菱重工名古屋発動機製作所	73・313 (117)	
2 月 17 日	35	トラック-デュブロン島潜水艦基地	73 (9)	
2 月 18 日	37	トラック-第 1 第 2 飛行場	313 (35)	
2 月 19 日	38	中島飛行機武蔵製作所	73・313 (35)	
2 月 25 日	39	東京市街地	73・313・314 (229)	

(出所) 小山仁示訳 (1995) より作成。

第 15 表：1945 年 2 月のマリアナからの B29 大規模本土空襲

月日	第 1 目標	第 2 目標	目標上空の 天候	第 1 目標 投弾機 / 出撃機数	第 2 目 標投弾機	その他 有効機	損失機	死者・() 内不明者数
2 月 4 日	神戸市街地	なし	5-6/10	69/110	0	30	2	1 (0)
2 月 10 日	中島太田製作所	なし	1-2/10	84/120	0	16	12	11 (93)
2 月 15 日	三菱名古屋発動機	なし	3/10	33/117	0	68	1	0 (11)
2 月 19 日	中島武蔵野製作所	東京市街地	5/10	0/150	119	12	6	0 (39)
2 月 25 日	東京市街地	なし	10/10	172/229	0	29	2	23 (0)

(出所) 工藤洋三企画・制作 (2009) および前掲・小山仁示訳 (1995) より作成。

この結果、作戦に参加する航空機の数 は 73 航空団のみで実施していたそれまでの作戦がほぼ 70 機台にであったのに対して大幅に増加し、100 機を超えるようになった。三航空団が参加した 2 月 25 日の東京市街地を目標とした作戦の出撃機数は 229 機に及んでいる。1 月中の 5 回の本土空襲作

戦の出撃機総数 446 機 (うち損失機 25 機、5.6%) に対して 2 月中は同じ出撃回数 5 回にもかかわらず、出撃機総数 726 機 (うち損失機 23 機、3.1%) であった(第 15 表)。出撃機数は 1.6 倍に増えたが、出撃総数に占める損失機の割合は逆に減少した。

また、第 16 表からわかるように、投下された

爆弾は航空機工場に対しては M64 をはじめとする一般目的弾と M76 といった焼夷弾の混投, 市街地に対しては E-28 や E-43 といった集束焼夷弾と M64 または T4E4 という集束破砕弾の混投で

あった。爆撃時間は日本時間の 14 時台から 15 時台, 投弾高度は 30,000 フィート前後で 1 月中の作戦と大きな違いはなかった。以上のことを確認して日誌の内容にもどろう。

第 16 表：1945 年 2 月の市街地爆撃の投下爆弾, 爆撃時間, 爆撃高度

月日	主要目標	第 1 目標投弾機数	主要投下爆弾	投弾時間	投弾高度 (ft)
2 月 4 日	神戸市街地	69 機	E-28, T4E4	14:57 ~ 15:56	24,500 ~ 27,000
2 月 10 日	中島太田製作所	84 機	M64, M76, E28,M43	15:05 ~ 15:41	26,900 ~ 29,400
2 月 15 日	三菱名古屋発動機	33 機	M64, M17A1, M 76, M43	14:02 ~ 14:55	25,300 ~ 34,000
2 月 19 日	中島武蔵野製作所	0 機	M64, M76, M43, M17A1	14:49 ~ 15:47	24,500 ~ 30,000
2 月 25 日	東京市街地	172 機	E46, M64	13:58 ~ 15:52	23,500 ~ 31,000

(出所) 工藤洋三企画・制作 (2009) および前掲・小山仁示訳 (1995) より作成。

二月一日 (木)

(73) 午前三時半, 又々警戒警報のサイレンに夢破られてハネ起きる。今度は自分の防衛当番なので早速飛び出して組内をドナッて一巡り。相手の□々^(不明)と情報を聞いてみると, どこからうせたのか, もう敵は渥美半島の上空を北進中だといふ。そのうちに例の爆音が頭上に迫ってくるらしい気配だ。用心にしくはなしと, 壕に入つてほんの一分間, 出て見ると投弾した模様もなく市の南寄りを東に行くらしい。次の情報で依然北進中だから名古屋は警戒せよといふ。現に敵はこの上空を東に去つた筈だのと思つてみると, 続いて敵は浜名湖附近を東進中だといふ。そのうちに地響きして大きな音が二つ続いて聞へて来た。敵め行掛の駄賃に投弾したものと見へるが余程遠い。間もなく敵機は御前岬附近から洋上に出, 南方さして脱去し, 僅か三十分許りで警報は解除になつた。今度のやうに現に東方へ去つたに^{かわらず}不拘, 北進中と実際と情報の喰違ひは初めてだ。これは監視哨から報告の誤りではあらうが, こういふ場合もあり得るのだから, 余り情報に頼りすぎて空の警戒を怠つてはならないことをつくづく感じたことであつた。

侵入一機 渥美湾から侵入 静岡県を経て脱去

(74) 敵め今日こそはやつてくるものと緊張待機したが遂に姿を見せなんだ。夕食を済し一服してみると, 午後七時半, 中部軍から四国沖に敵一機の侵入が報ぜられた。脚の早い敵だ。遠くとも来た以上, 油断ならずと次の情報に注意してみると, 果せるかな四国を突き抜け瀬戸内海を通つて岡山県に入り, それから向きを東にかへ和歌山県に達し, 脱去するやうに見せかけ忽ち反転して阪神を侵し, 更に東進して三重県にやつて来たので, 八時少し前東地区に警戒警報の発令となつた。情報では名古屋に向ふらしいとあつたが, そんな風もなく伊勢湾を横切り渥美半島からやつて来た。

爆音がもう西北から聞へて来て, 頭上に迫るらしい気配に遠く近く待機の鐘が鳴る。メガホンに口に刻々状況を組内に知らせて廻る。敵は市の南寄りを東南さしてゆくらしい。かくて敵は浜名湖附近から洋上に出, 南方に脱去したので, 八時二十分警報は解除になつた。折柄十九日の月はまだ山のはを登らず, 空は一面に曇つて雨催いの暗い夜だった。

侵入一機 四国より大坂を経 当地方通過遠州灘へ

第 17 表：2 月 1 ～ 4 日の気象観測爆撃作戦と写真偵察任務

月日	作戦	出撃時間 (K 時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時間 (日本時)	目標 (地域)
2 月 1 日	WSM159 3PRM31 WSM160 WSM161	312155K 010320K 011305K 011737K	312055 010220 011205 011637	010355 010920 011905 012337	東京 岡山・大阪 名古屋 東京
2 月 2 日	WSM162 WSM163 WSM164	012200K 021301K 021705K	012100 021201 021605	020400 021901 022305	大阪 東京 大阪
2 月 3 日	WSM165 WSM166	022201K 031306K	022101 031206	030401 031906	名古屋 大阪
2 月 4 日	WSM167 WSM168 3PRM32 WSM169 WSM170	031809K 032213K 040215K 041428K 041714K	031709 032113 040115 041328 041614	040009 040413 040815 042028 042314	大阪 大阪 神戸・大阪 神戸 神戸

(出所)「作戦要約」より作成。

【解説】

2 月 1 日は、まず 03 時半に警戒警報が鳴り始めた。B-29 は浜名湖付近を東へ進み、御前崎付近から洋上へ出たようである。警戒警報は 30 分余りで解除となった。しかし、監視哨の報告に誤りがあったのか、ラジオ情報は実際の飛行コースと大きく食い違っていたようである。同日 20 時少し前になって、この日 2 度目の警戒警報が発令された。最終的に伊勢湾を横切り、渥美半島を経て、豊橋の南寄りを進んで浜名湖付近から洋上へ抜けた。日誌の筆者は防衛当番に当たっており、いずれの場合も組内に警戒を呼びかけて回った。

米軍の気象観測爆撃機と写真偵察機の来襲について、第 17 表に示した。これに照らし合わせてみると、2 月 1 日の 03 時の警戒警報は、サイパン基地を 31 日の 20 時 55 分に出撃した WSM159 の B-29 と考えられる。米軍資料によれば、同機は雲量 9/10 の空から東京の目標に 2000 ポンド一般目的弾 3 発を投下したことになる。『朝

日新聞』(1945 年 2 月 2 日付)は「一日午前三時三十分過ぎ・・・一機が渥美半島方面から侵入、静岡県西部の水田中に爆弾を投下した」と報じている。また、豊西村空襲記録(1944-45)は、03 時 25 分警戒警報発令、03 時 55 分同解除として「浜松北方上島地区へ投弾後南方洋上へ脱去セリ」としている。同機が渥美湾(三河湾)付近から侵入して浜松に投弾してそのまま海上に抜けたと考えられる²⁾。米軍資料が東京に爆弾を投下したとしているのは誤りであろう。

同日 20 時少し前の警戒警報は、名古屋に向けて出撃した WSM160 と考えてよいだろう。名古屋空襲を記録する会(1985)は、B-29、1 機が室戸岬から大阪、名古屋、岡崎、二川というコースを進み、この間、20 時 13 分に大府町に「500K 級大型爆弾と推定される」(14 頁)爆弾を投下したとしている³⁾。なお、3PRM31(岡山・大阪)は東海地域の警戒警報の対象にはならなかったようである⁴⁾。

2) 浜松空襲・戦災を記録する会(1973)は、市内では上島に爆弾 1 発、半壊 6 戸、郡部には爆弾 2 発、半壊 3 戸としている(290、292 頁)。原田良次(1973)は、「終日警報なし」と記している。

3) あいち・平和のための戦争展実行委員会(2015)『戦時下・愛知の諸記録 2015』が戦後 70 周年を記念して刊行された。同書には、愛知県各地の防空警報時刻および気象観測爆撃機と写真撮影機を含めた米軍機来襲についての資料も掲載されている。

4) 『朝日新聞』(1945 年 2 月 2 日付)は「一日午前九時ごろマリアナ基地の B29、二機が別々に四国南部より侵入、四国東部および大阪湾付近を偵察のち投弾することなく南方に脱去」と報じた。「二機」というのが気になるが、どちらかは 3PRM31 であろう。なお、写真偵察機の作戦については工藤洋三(2011)175 頁も参照。以下も同様である。

二月二日（金）

(75) 雨音に眼をさまし用便に起きて見ると、雨が盛んに降つて居る。正に十二月七日の地震以来始めての降雨だ。あれ以来数度の強震に屋根を傷められてゐる人達には御気の毒だが、全く恵みの雨だ。そんなことを思ひながら床につくと、今度は警戒警報のサイレンが鳴り出した。身支度して外に出ると、風さへつけて雨は益々ふつてゐる。

雨を避けて軒下に立つてゐると、大崎、大清水、市役所、岩田、遅れて豊川と次々に鳴るサイレンの中に例の特徴ある爆音が聞へる。もう敵機が近づいて居るのだが、雨とサイレンではつきり聞き取れず、位置も方向も判断が出来ない。ただ西北の空から聞へてくるので待避の準備をしたが、間もなく去つたのか聞へなくなつて仕舞つた。

何でも敵は熊野灘からやつて来たらしい。其後の情報に南信の飯田附近を東進中だといふ。間もなく山梨県に侵入を報じ警報は解除になつた。発令は丁度〇時〇分、解除が〇時三十分。先づ先づ事故なく済んで結構だつた。

侵入一機 伊勢湾より愛知、長野、静岡県を経て相模湾へ

(76) 午後十一時を夢うつつ聞いて暫くすると、婆さんに起された。また警戒警報のサイレンが鳴り出したからだ。戸外に出ると、今し方山の端を出た月が静かに下界を照して居る。情報を聞くと、熊野灘を北進する敵一機。程なく接岸するだらうといふが中々来ない。大方どこかで道草でも喰つてゐるのだらう。三十分もして漸くやつて来たはよいが、ぐるりと向きをかへ三重県に入り、名古屋を襲ふと見せかけ伊勢湾を横断し、渥美半島めがけてやつて来た。

敵は満天に輝く星を縫ふやうにして西南から頭上めざしてやつてくる。慌てものが待避の鐘を打ち出した。耳をすますと西寄りを北に行くらしい。また名古屋を目指してゐると判断したが、爆音は依然として西天から聞へ、それが南に廻つたり西から聞へたりする。大方この近くで旋回をやつて居るだらう。情報では、渥美半島を東進中といふがそんな筈はない。漸く聞へなくなつたと思ふ

と、遙か西の方からドドーンといふ響きが伝はつて来た。獣め投弾したに違いない。暫くするとまた北方から爆音が聞へて来た。もう名古屋を襲つての帰りと見へる。遙か北方を東進するのに慌てものがまた待避の鐘を打ち出した。間もなく爆音は闇に消え、〇時三十分漸く警報は解除、北風の馬鹿に寒い夜だつた。

侵入一機 不詳

〔解説〕夜中に雨の音で目をさます。実に12月7日以来のまとまった雨ということであろうか。日付が変わった2月2日は、00時00分の警戒警報で始まった。警報のサイレンは「大崎、大清水、市役所、岩田、遅れて豊川と次々に鳴る」とあるので、こうした施設が市内および周辺にあったことがうかがわれる。日誌では熊野灘から侵入し飯田を経て山梨方向へ向かったとしている。このB-29は、日本時間1日16時37分に東京に向けて出撃したWSM161(東京)である(第17表参照)。米軍資料によれば、目標に2,000ポンド一般目的弾3発を投下したとあり、レーダー捜査手が東京湾に10隻の船舶を確認している。

この日、2度目の警戒警報は23時頃であった。雨はすでに上がって月が出ており、満天の星が輝いている。「名古屋を目指してゐると判断」していると「遙か西の方からドドーンといふ響きが伝はつて来た」。時間的に見てこのB-29はWSM164であろう。同機の目標は大阪であったが、米軍資料によれば、臨機目標の名古屋に2,000ポンド一般目的弾3発をレーダー投下した。また、名古屋空襲を記録する会(1985)によれば、被害地域は大府町になっている。

日誌は、WSM162(大阪)とWSM163(東京)については触れていない。米軍資料によれば、前者は大阪に2,000ポンド一般目的弾3発を、後者は東京に2,000ポンド一般目的弾3発をそれぞれレーダーで投下した。WSM162について『朝日新聞』(1945年2月3~4日付)が「二日午前四時すぎ一機が四国南部より侵入大阪に若干の投弾のち伊勢湾南方より脱去」、WSM163について「午後八時ごろ帝都に侵入、若干の爆弾を投下した」

とそれぞれ報じている⁵⁾。いずれの来襲も豊橋地区の空襲警報の対象にならなかった。なお、原田良次(1973)は「二〇〇〇関東西部にB29一機来襲、警急隊四機出動」とし、「この来襲一機は気象観測機ならん、これは『地獄の使者』なり。近くまたはげしい敵来襲が予想される」(154頁)と記している。

二月三日(土)

(77) 寒い晩だ。中にはまだ起きてた人もあるが、家ではもうとくに寝てみた午後の八時。夜の静寂を破つてサイレンが鳴り出した。戸外に出ると星明りのべらぼうに寒い晩だ。情報を聞いて居ると、例により熊野灘を北上する敵一機、程なく接岸するだらうといふ。成程間もなくやつて来たはよいが大胆にも沿岸で旋回を初めた。こうして我方の虚を衝かうといふのだらう。一周するとまた北進を続け、大台ヶ原山附近で右に名古屋、左に阪神を望んでまた旋回し、次いで滋賀県に侵入したが、暫く爆音を減じて所在の踏晦(韜晦)を策し、大阪の北方を神戸に向つたが、途中で反転、東進して奈良県に入り、木津の近くに二三投弾して三重県に向つたが、またまた方向をかへ熊野灘に出て南方に脱出したので、九時になつて漸く警報解除となつたが、再度に亘つて旋回し方向を迷はせたり、爆音を減じて踏晦を図つたり、西すると見せて反転東に向つたり、我が防衛陣を翻弄するやうな不適な行動には全く癪にさはらざるを得なかつた。

侵入一機	潮岬より侵入	大阪に投弾	熊野灘へ脱去
------	--------	-------	--------

[解説] 3日は節分であるが、日誌はその話題には全く触れていない。この日は20時に警戒警報が発令された。日誌からはB-29の「再度に亘つて旋回し方向を迷はせたり、爆音を減じて踏晦を図つたり、西すると見せて反転東に向つたり、我が防衛陣を翻弄するやうな不適な行動に」腹立たしさを隠せない様子がかがえる。このB-29は日本時間の3日12時06分に大阪に向けて出撃

したWSM166と考えられる(第17表参照)。同機は大阪に2,000ポンド一般目的弾3発を投下した。これについて『朝日新聞』(1945年2月5日付)は「三日夜七時五〇分ごろ潮岬より侵入、大阪府に投弾」と報じている。

日誌には触れていないが、これとは別に日本時間の2日16時05分に大阪に向けて出撃したWSM164(大阪)と同日21時01分にサイパン基地を名古屋に向けて出撃したWSM165(名古屋)がある。米軍資料によれば、WSM164は、大阪に投弾せず臨機目標の名古屋に2,000ポンド一般目的弾3発を投弾した。またWSM165は、名古屋には投弾せず、臨機目標である新宮に2,000ポンド一般目的弾3発を投下したことになっている。津の空襲を記録する会(1986)は、2日23時21分から3日00時43分と、5時8分から5時29分の2度の警戒警報を記録している。それぞれWSM164、WSM165に相当するものと考えられる。『朝日新聞』(1945年2月4日付)は、WSM164についてのみ「三日午前零時過ぎ一機は名古屋付近に投弾したが被害なし」と報じている。

二月四日(日)

(78) 毎日毎日くるかくるか心まちしてみたマリアナの敵が漸くやつて来た。午後二時に近く警戒警報のサイレンが鳴り出した。情報をきくと、今日も数個の編隊で次々に熊野灘を北上しつつありといふ。好敵御参なれだ。御手並拝見しやうと待ち構へる。何でも今日は相当の機数を揃へてやつてくるらしい。二時五分中地区及東地区に空襲警報が発令され、忽ちにして鉄壁の防空陣が張られる。やがて敵の先登は熊野沖に達したが、何と思つてかここで一旋回し、また北上を続ける。敵め名古屋へくるか大阪へ向ふかと、固唾を呑んで待つてみると、やがて奈良県に入り阪神地方へ向つたといふ。何れ阪神を荒してからことらへもくるだらう。二時四十分、東から西に向ふ純白の友軍機が四機、それから少し間

5) WSM163について豊西村空襲記録(1942-45)は「御前岬西方より静岡市、富士山西方より東部侵入」(警戒警報発令19時49分・同解除20時17分)としている。

をおいてまた一機が西を向ひてゆく。これを敵機と見て慌てたものが少からずあるらしい。

三時には大阪上空で友軍機が敵編隊の中に突込んで盛んに攻撃中だといふ。その頃別の一編隊が志摩半島の沖合にあり、旋回しつつ機をねらつてゐたが、いつのまにかこれも阪神地方へ行つたらしい。初めのうちこの辺りの空はちぎれ雲の浮ぶ程度だったが、時を経るに従ひ西の半天にあつた雪雲(が)かぶさつて来た。どうも友軍機のやうに思はれる。一方大坂を侵した敵は神戸、明石方面を荒し、追い絶る味方機のために次々に撃墜されたり火を吐いて逃げ出したり。折角久し振に來た甲斐もなく、東して名古屋までくる余裕ないので、あたら爆弾を海中に棄てて、あたふた紀淡海峡を南方に遁走。かくて三時五十分、先づ空襲警報が解除され、続いて四時少し過ぎ警戒警報も解除になって、高らかに鉄壁の我が防衛陣に凱歌が挙つた。

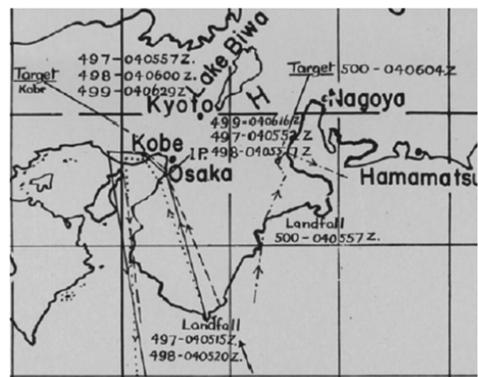
来襲約百機 主として阪神に行動 撃墜六機 撃破三十機以上

組内人員の異動により隣保班長と協議の上、先きを取極めた防衛当番を次のやうに組替へ今日から実行することとした。

(一) 杉本, 佐々 (二) 渡辺, 松井 (三) 中村, 三沢 (四) 相原, 山下 (五) 箆, 園原
尚, 自分は当番を除き昼間の防衛と不在者の代理に当ることになる。 二・四記

[解説] 2月4日は神戸港および市街地を目標にした大規模爆撃(作戦任務26)が展開された。この作戦は2日に予定されていたが悪天候のため4日に延期されたものであった。米軍資料によれば、日本軍は航空戦力を東京と名古屋における防衛に戦力集中していた。このため、市街地への攻撃に加えて、東京と名古屋に集中した防衛力(航空機と対空砲火)の配備を分散化するため神戸を目標に選んだ。E28, 500ポンド集束焼夷弾と

T4E4, 500ポンド集束破碎弾を搭載した73航空団の72機と313航空団の38機, 計110機が日本時間の4日05時56分から06時37分にサイパンおよびグアム基地を出撃した。このうち73航空団の37機がE28を計547発, 91.2トン, T4E4を37発, 7.4トン, 313航空団の32機がそれぞれ408発, 68トン, 31発, 6.2トンを第1目標に投弾した。また26機が最終目標として尾鷲, 串本, 小谷, 新宮, 松坂⁶⁾のいずれかを, 3機が臨機目標として大津を爆撃した。焼夷弾による市街地爆撃は1月3日の名古屋爆撃以来であった。



第28図: 2月4日の飛行ルート(73航空団)

この様子を日誌は、14時に警戒警報、14時05分に空襲警報が発令され、熊野灘から侵入したB-29は「名古屋へくるか大阪へ向ふか」というコースをとって、最終的に阪神方面に向かったと記している。空襲警報解除は15時50分、空襲警報解除は16時過ぎであった。日誌は「撃墜六機、撃破三十機」とラジオ情報と思われる日本軍機の活躍ぶりを伝えているが、米軍資料によれば、この作戦での損失機は2機であった。

実はこの日は、上述の大規模爆撃のB-29の他にWSM167~169(大阪, 大阪, 神戸)と3PRM32(神戸・大阪)のB-29およびF13が来襲している。米軍資料によれば、WSM167は大阪ではなく臨機目標の新宮に、WSM168は予定

6) 最終目標のうち松坂に対しては、73航空団の500群団所属の15機がE28を242発, T4E4を15発投下した。500群団は、航法ミスにより予定地点より50マイル東に上陸したが、これを修正できなかったため、最終目標の松坂を爆撃した。津の空襲を記録する会(1986)は「B29, 16機松坂神戸へ小型爆弾, 焼夷弾投下, 西川上, 高田, 久保, 垣鼻, 下村で死者8, 消失151」と伝えている。

通り大阪に、それぞれ2,000ポンド一般目的弾3発を投下、WSM169は神戸ではなく臨機目標の串本に500ポンド一般目的弾12発を投下したになっている。また、3PRM32は第1目標の神戸および大阪地域の写真を撮影したが、基地への帰還の際に着陸に失敗した。ただし、日誌にはこれらの来襲に関連する記述は見当たらない。

『朝日新聞』（1945年2月5日付）は「四日午前零時40分ごろ潮岬より侵入、和歌山に投弾」（WSM197）「四日午前四時三十分ごろ高知東方より侵入、大阪に投弾」（WSM168）と報じ、『同』（1945年2月6日付）は「四日午後九時三十分頃B-29一機は潮岬附近に接近したが本土に侵入することなく脱去」（WSM169）としている。津の空襲を記録する会（1986）にもほぼ同じ時間帯で3回の来襲記録がある。3PRM32については目下のところ不明である。

第18表：2月5～9日の気象観測爆撃作戦と写真偵察任務

月日	作戦	出撃時間 (K時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時間 (日本時)	目標 (地域)
2月5日	WSM171 3PRM33 3PRM34 WSM172 WSM173	042104K 050205K 050415K 051702K 051745K	042004 050105 050315 051602 051645	050304 050805 051015 052302 052345	神戸 神戸・大阪 明石・神戸 神戸 神戸
2月6日	WSM174 3PRM35 3PRM36 WSM175	051920K 060329K 060404K 061341K	051820 060229 060304 061241	060120 060929 061004 061941	神戸 玉島 明石・神戸 神戸
2月7日	WSM176 WSM177 3PRM37 3PRM38 WSM178	062010K 062036K 070224K 070300K 071356K	061910 061936 070124 070200 071256	070210 070236 070824 070900 071956	神戸 神戸 太田 大島 神戸
2月8日	WSM179 WSM180 WSM181	072237K 072006K 081443K	072137 071906 081343	081437 080206 082043	神戸 神戸 神戸
2月9日	WSM182 WSM183 3PRM39 3PRM40 WSM184	081849K 中止 090324K 090600K 091408K	081749 090224 090500 091308	090049 (早期帰還) 091200 092008	神戸 神戸 玉島 太田 大阪

(出所)「作戦要約」より作成。

なおこの日、日誌にもあるように、町常会が開かれ組内人員の移動に伴う、防衛当番の組替えが行われた。

二月五日（月）

現下の情勢に応じ防空体制を一層強化するの必要があり四日の町常会に於て協議の結果一応の成案を得たので今夜組常会を開きこれを説明し、次の事項を実施することにした。尚八日、町及警防団に於て右につき各戸点検ある筈。

一、各戸各室毎に一ヶ所以上天井板をとり除き出入

口とせよ

- 二、二階建の家は二階にも用水及防火器具を備へよ
- 三、塀に通路を明け隣家への往来を自在にせよ
- 四、屋内にも梯子を備へ天井裏の火に備へよ
- 五、蓆は一ヶ所二枚以上、火叩は長短二枚を備へよ
- 六、用水を増加し補充を怠らず且つ氷結を防げ
- 七、待避壕の増強、地窖の急設を図り貴重品は疎開せよ
- 八、留守にするときは必ず隣家に告げ且つ戸締りをするな
- 九、未明にたく煙筒の火を極力警戒せよ
- 一〇、周囲にある可燃物を速に処理せよ

以上

〔解説〕神戸市街地の焼夷弾爆撃当日の4日の町常会では焼夷弾爆撃に際しての家庭や組における防衛体制の強化について話合われた。そこで確認された10項目について5日の組常会で報告されるとともに、8日には町会および警防団による各戸の防火対策に対する点検が予告された。前号でも指摘したように空襲に際しては、避難ではなく、あくまで消化活動が前提とされていたことが改めて確認できる。ちなみに内務省(1943)『時局防空必携 昭和十八年改訂』は、家庭、隣組の防空として「ふだんの準備」に続いて「警戒警報が発令されたら」、まず防空用服を着て、防火用水を点検し、足りないところは補充する。「空襲警報が発令されたら」門、倉庫、物置等の鍵を外し、火元を始末し、雨戸やガラス戸を閉めるなどの処置をする。「敵機が来たら」防護監視員は敵機を見たり、爆音や砲声を聞いたならその様子を組内のものに大声で知らせるなどの行動をする。そして「焼夷弾が落ちたら」防火に当たると同時に大声で近隣に知らせることなどを明記している。常会ではそうした内容を改めて確認し、各戸に防火対策の徹底を促すものとなっている。

二月六日(火)

軍管区の改正。従来この地方は中部軍管区東地区と称せられて来たが、来る十一日から次のやうに改正されることとなった。

東海軍管区 東海道地区 静岡・愛知・三重・岐阜
北陸道地区 石川・富山

尚、中部軍管区には近畿地区、中国地区、四国地区の三地区があることとなった。

二月八日(木)

昨日午後から焼夷弾落下の想定のもとに防空演習が活発に行はれ、それが済んだ頃から降り出した雪は、一夜のうちに一面の銀世界となったものの、大空の敵に備へて郷土防衛の態勢に聊かの緩みもない。去る四日神戸を中心とした敵の空襲以来、この地方にこそ敵影を見なかつたものの四国から近畿地方へ

かけては連夜二回三回敵機の侵入があり、その度毎に投弾してゐるのだから明かに神経戦をねらつたもので、これに引懸つて大騒ぎなどしたら、こちらの負けだ。宜しく胆玉(肝玉)を大きく爆弾位はね返す程の度胸が欲しい。それに今日はあれから四日目、敵もそろそろ整備を終へた頃だらうから、或は大詔奉戴日のけふ辺りまたまた大挙してやつてくるかも知れぬ。とは云えB二十九など何百機で来やうともビクともするものでない。我々郷土の防衛陣は、鉄石以上でそこに聊かの緩みもないのだから。

午前十時 記。

〔解説〕日誌には2月5日、6日、7日にはB-29来襲の記述はない。5日には第17表のWSM170、第18表のWSM171、PRM33～34の計4機、6日にはWSM172～175、PRM35～36の計6機、7日にはWSM176～178、PRM37～38の計5機、要するに気象観測爆撃機9機、写真偵察機6機、合計15機が主に阪神地区を目標に来襲したことになっている。ただ、このうちのPRM36は名古屋を目標にしていた。

これらの来襲について日誌は「四日神戸を中心とした敵の空襲以来、この地方にこそ敵影を見なかつたものの四国から近畿地方へかけては連夜二回三回敵機の侵入」があったと記すのみである。いずれも阪神地域を中心とした来襲であったために、愛知県下には警戒警報が発令されなかった。

米軍資料によれば、WSM170は500ポンド集束破砕弾12発を、WSM171は500ポンド一般目的弾を、WSM172とWSM173は500ポンド集束破砕弾を、WSM174～177は500ポンド一般目的弾を、WSM178は500ポンド一般目的弾を、いずれも神戸に投下した。また、3PRM33は神戸・大阪、3PRM34は明石・神戸地域、3PRM35は玉島、3PRM36は明石・神戸、3PRM37は太田といった目標の写真を撮影したとしている⁷⁾。3PRM38は大島を目指したが、南方諸島のレーダースコープ写真を撮影した。

7) PRM37(太田)について、原田良次(1973)は「〇七五〇より情報、B29一機勝浦上空より佐倉―足利をへて太田を偵察、土浦より脱去」と記している。

『朝日新聞』(1945年2月6日～9日付)は、「五日午前零時過ぎ四国東岸方面から…一機が神戸に侵入、小型爆弾を投下した」(WSM170)「五日午前四時三十分一機は神戸に侵入、投弾した」(WSM171)。また「五日午後十一時半過ぎ二機を持って、同十一時五十分ころ」一機が「四国方面より神戸付近に侵入、爆弾、焼夷弾を投下」(WSM172～173)したとも報じている。また、「六日午前一時四十分ころ」一機が、これも「四国方面より神戸付近に侵入、爆弾、焼夷弾を投下」(WSM174)、「一機は六日午前九時ごろ室戸岬より侵入、十時三十分、神戸、大阪、紀伊半島方面を経て脱去。更に十時四十分ごろ足摺岬より侵入、愛媛県南部を経て高知市西方地区より南方へ脱去した。ともに偵察、投弾なし」(3PRM35～36)「六日午後八時過」にも一機神戸に来襲した。さらに「七日午前二時半、同二時四十分ころ・・・B29各一機神戸に来襲投弾」(WSM176～177)「七日午後七時三十分頃主として高知、香川の両県下に来襲投弾」(WSM178)などと報じている。3PRM33～34については目下のところ日本側の資料で確認できていない。

続く8日と9日についても第18表から明らかのように、WSM179～WSM184、PRM40、すなわち気象観測爆撃機5機、写真偵察機1機、合計6機が阪神地域を中心に飛来した。米軍資料によれば、WSM179、WSM180、WSM182は神戸に、それぞれ500ポンド集束破碎弾14発を投下した。WSM181は神戸を目標とするも機械の故障で早期に帰還、WSM183は機械の故障のため出撃が中止された。WSM184は大阪に2,000ポンド一般目的弾3発を投下した。また、3PRM40は太田の写真撮影した⁸⁾。

『朝日新聞』(1945年2月9～11日付)は、「八日午前三時頃神戸付近に来襲投弾」(WSM180)「八日午前五時半頃再び神戸に来襲、小型爆弾を投下」

(WSM179)「九日午前二時頃B29一機は阪神地区に来襲、神戸付近に若干投弾」(WSM182)「一機は九日午後一時二十分頃銚子付近から侵入、関東西北部を偵察」(3PRM40)「九日午後九時ごろ大阪に侵入爆弾を投下」(WSM184)と報じた。

この間の来襲のようすも日誌には記載されていない。愛知県下各地の記録にも同様に残っておらず、5日から9日までの5日間は記録の空白と言ってもいい状況が見られる。この空白の理由は、この間の作戦が阪神地域を中心に展開され、その際に米軍機が侵入または脱去の際に東海地域を通過しなかったこと、すなわち、『朝日新聞』の記事にも見られるように進入路として四国方面を利用して阪神地域に向かったということに求められるであろう。ただこの間、執拗に阪神地区が気象観測爆撃および写真偵察の対象に選ばれた理由は、その後の太田、名古屋、東京と続く大規模爆撃の布石とも考えられるが、理由は明らかではない。

なお、2月6日の日誌の記述にあるように、2月11日から中部地域と関西地域にまたがっていた中部軍管区から東海地区(静岡・愛知・三重・岐阜)と北陸地区(石川・富山)からなる東海軍管区として独立することになっていた。一方、中部軍管区は近畿地区、中国地区、四国地区の三地区含むことになった⁹⁾。

二月十日(土)

(79) 夜半、警戒警報のサイレンに眼を醒ましてはね起きた。時計は丁度午前二時を指して居る。星の明るい夜で処々に残雪はあるが風もなく静かな夜で思つた程寒くはない。

忽ち西北から爆音が聞へて来た。敵機は一機で満天の星を縫ふやうに真上をさして迫ってくる。待避の鐘がやかましく鳴り出した。沈黙の一分間。敵は投弾もせず東南さして行つて仕舞つた。間もなく警報は解除。この間僅かに二十分。ラジオは雑音甚しく情報が聞きとれなかつたので敵の行動は不明だが、

8) PRM40については、原田良次(1973)は「一四〇〇すぎ銚子よりB29一機偵察来襲」と記している。

9) 『中部日本新聞』(1945年2月1日付)は「防衛と生産の体制確立に関する去る十二日の閣議決定にもとづき陸軍では、軍管区と行政協議会の行政区域とを一体化するため軍管表及びこれに伴ふ所管の改正を行ふこととなり、去る二十四日右に関する軍令を交付、二月十一日実施する」と報じている。

その方向から察すると、名古屋を経てこの上空を浜名湖方面に向ひ、それから洋上に脱出したのであろうが、この地方としては暫く敵影を見なかつたので、安きに流れやすいは人心の常ながら、多少、心に緩みを見たやうな傾もないではなかつた。然し、困難な戦ひは正にこれからだと思へば、そんなことでは駄目だ。油断させるのも敵の謀略だからなあ。尚、組の警報用として相原氏寄贈の太鼓を今回から用ひ初めたが、他に類のないだけに大分調子がよいらしい。

侵入一機 奈良県より本県に入り 投弾して脱去

(80) 四日の坂神地方の空襲から今日で六日目。もうそろそろ来てもよい筈と心まちしてゐると、午后

の一時少し過ぎ、果して警戒警報のサイレンが鳴り出した。このひるの空襲は、いつも相当な数を揃へてくるのが例なので、今日もてつきり次から次へと編隊でくるものと勇躍待機する。間もなく空襲警報発令。所が相憎今日は至る処に飛雲があり、ところどころに青天井が見へてゐる程度で、視界の極めて悪いのが聊か心がかりだ。情報によると、敵は浜名湖附近から編隊で侵入したらしい。暫くすると北方の雲中から爆音が聞へ、それが西に向つて行く。素破こそ敵機と慌てものが待避の鐘を打ち出した。所が一向名古屋へいつた様子がない。その内に敵二機は、浜名湖附近に焼夷弾をばら撒いて南方へ脱去したといふ。すると雲の中から聞へた爆音は友軍機のものだつたのだらう。さういへば西から北へかけて

第 19 表：2 月 10 日の気象観測爆撃作戦と写真偵察任務

月日	作戦	出撃時間 (K 時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時間 (日本時)	目標 (地域)
2月10日	WSM185	091901K	091801	100101	名古屋
	WSM186	092127K	092027	100327	大阪
	3PRM41	100240K	100140	100840	太田
	3PRM42	100406K	100306	101006	沖繩他
	3PRM43	100308K	100208	(早期帰還)	郡山
	73PRM1	100355K	100255	100955	浜松
	73PRM2	100346K	100246	100946	玉島
	WSM187	101444K	101344	102044	太田
	WSM188	101620K	101520	102220	太田新工場

(出所)「作戦要約」より作成。

は、其後も引切りなしに爆音が聞へて居る。やがて中部軍管区内には敵機なしとの情報で、二時少し前空襲警報につづいて警戒警報も解され、初めの予想を裏切つて龍頭蛇尾に終つたのは、何にしてもめでたしめでたしだ。

来襲九十機 五梯団 群馬県太田を中心に暴爆

前のが解除になつてほんの十分たつか経たないかですぐまた警戒警報が鳴り出した。尤も前に後続編隊のある模様とあつたからやつらが押しよせて来たのだらうと、雲の切間切間を見張つてみたが、一向それらしい蔭もなく十五分許りて解除になつた。これは前のおまけとして来襲の数から除いて置く。

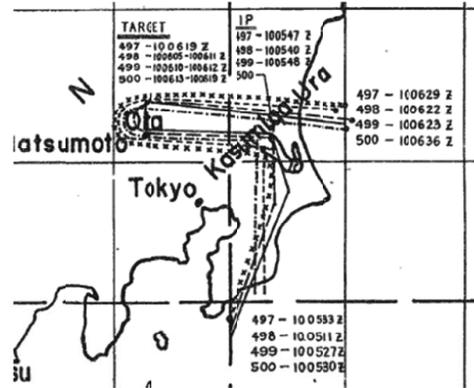
その戦果 撃墜十五機 撃破約五割に達すと

[解説] 2月10日の日誌は「この地方としては暫く敵影を見なかつた」が、同日02時に徐々に警戒警報のサイレンが鳴ったと書いた。これはWSM185であると考えられる。米軍資料によれば、同機は名古屋を目標に出撃し、レーダーで第1目標に2,000ポンド一般目的弾3発を投下した。マリアナ時間の9日から10日にかけてWSM186(大阪), PRM41(太田), PRM42(沖繩), PRM43(郡山), PRM44(太田)がそれぞれ出撃した。このうちPRM42は、沖繩が雲に覆われていたため宮崎飛行場を撮影、PRM43は、強風と燃料の不足のため本土に上陸できなかった。PRM44は第1目標に到達できず横須賀地域と三宅島を撮影した。またこの日は、後述するように群馬の中島飛行機太田製作所を第1目標、東京の

港湾および市街地を第2目標としての大規模爆撃（作戦任務29）が行われたが、これに先立って73PRM1が東京へ73PRM2が玉島へ向けてそれぞれ出撃している¹⁰⁾。73PRM1は最終的に対象が浜松に変更されたが、雲のために撮影できなかった。これら一連の来襲については飛行コースの関係から豊橋地方には警報は発令されなかったようで、日誌ではまったく触れられていない。

『朝日新聞』（1945年2月11日）は、「十日午前二時ごろ奈良、名古屋方面に來襲、愛知県下に投弾」（WSM185）「同日午前四時頃再び大阪に爆弾を投下」（WSM186）、そして「午前九時三十分頃銚子方面から関東北部地区に侵入、相模方面から脱去」（PRM41）「同じく一機は浜松付近から帝都上空に侵入午前十一時頃房総方面から脱去」（73PRM1）「同じく一機は同十時四五分頃高知付近から四国に侵入各県上空を巡回して南方に脱去」（73PRM2）「更に一機は同十一時二十分頃宮崎県下に侵入したが以上四回いづれも偵察のため」（PRM42）などと伝えた。

作戦任務29では中島飛行機太田製作所に対して73航空団の81機、313航空団の35機、合計116機が日本時間の06時06分～6時54分に出撃した。部隊は、房総半島から侵入、そのまま北上して、霞ヶ浦の北端をIPとして太田に向かった。各航空団それぞれ52機、30機、計82機が日本時間の15時05分～15時45分にかけて第1目標を目視またはレーダーで爆撃した。M64、500ポンド一般目的弾518発、129.5トン、M76、500ポンド焼夷弾140発、35トンが日本時間15時05分から15時41分に投下し、目標地域の屋根面積で約755,900平方フィートに損害を与えた。ただ、この作戦では12機もの損失機と死者11名、行方不明者93名を出した。そのうちの2機は友軍機同士の空中衝突であった。



第29図：2月10日の飛行ルート（73航空団）

この作戦では73航空団の2機のB-29が東京の防御を警戒するとともに名古屋地域への攻撃と見せかけるため、本隊の約1時間前に出撃し、浜松に向かった。日本本土100マイル手前で早期警戒レーダー妨害用のロープを散布し、日本時間の13時33分に浜松に対してE28集束焼夷弾24発4トンを投下した。

日誌に「午后の一時少し過ぎ、果して警戒警報のサイレンが鳴り出した」「敵二機は、浜名湖附近に焼夷弾をばら撒いて南方へ脱去したといふ」とあるのは、浜松へ向かった2機の牽制部隊を指している。この日の日誌にはその後警戒警報の発令を記していない。これに対して豊西村空襲記録（1944-45）は、13時13分警戒警報発令13時31分空襲警報発令、同解除14時00分、警戒警報解除14時24分として、「御前岬ヨリ浜松上空ヲ名古屋方面へ侵入」「主力は関東北部へ侵入投弾、敵機約九十」「浜松市砂山地内焼夷弾投下、寺島、中島、高原工場全焼」と記した¹¹⁾。

第19表によれば、10日には20時および22時過ぎにWSM187とWSM188が東京を目指して来襲したことになっている。米軍資料（2月11日付作戦要約）によれば、いずれも目標は太田または太田新工場となっていて、WSM187は第1目標に目視で2,000ポンド一般目的弾3発を、WSM188は東京の産業地域に目視で2,000ポンド一般目的

10) 73PRMは、73航空団の写真偵察機と考えられるが現在のところ不明。

11) 浜松空襲・戦災を記録する会（1973）は、被弾地区は市内の砂山、寺島、北寺島、竜禅寺、中島、領家で、焼夷弾786発を受け、全焼16戸、半壊14戸などとしている。

弾3発を投下した。原田良次(1973)は「夜二〇〇〇B29一機焼津より大月—甲府—秩父をへて東京に侵入」と記し、豊西村空襲記録(1944-45)は、10日21時13分警戒警報発令、21時45分同解除「天竜川河口ヨリ上陸、浜松上空ヨリ東方富士川上流ヨリ東部軍区侵入セリ」と記している。それぞれWSM187とWSM188に当たると思われる¹²⁾。

日誌の第二冊目は、2月10日をもって終了した。終了に当たってこれまでのB-29の来襲回数を整理するとともに、第二冊目開始直後に発生した三河地震に関連して思いつくままを記している。

顧みれば、敵が初めて我々の上空に見参せし十一月二十三日からけふまで丁度八十日。そして警報の発令されたこともまた八十回を数へ、愈々本夜半より改組された東海軍管区に入り、東海道地区と呼ばれることとなつた。そこに何らかのエポックがあるやうな気がするので百回までと思つた第二冊もここで打切り、改めて第三冊に移ることとする。

二・一〇記

昭和二十年一月十二日より同年二月十日迄、即ち、第五十一回空襲より第八十回空襲まで、その間三十日にして三十回の空襲を記録し、即ち第二冊を終る。

豊田珍彦(印)

地震

地震国の我が国に地震のあるのは不思議ぢゃない。その地震を筆頭に火事と親爺と雷とを恐ろしいものの代表に選んだのは昔のこと。今ぢゃ、もつと恐ろしいものがいくらかもある。地震の恐ろしいのは、夜だらうが昼だらうが突然やつて来て家を倒し人命を傷ふからで、それでゐて古往今来、人々はその地震に脅えながらこれを予知する方法も考へず、これを防ぐ手段も何一つ案出されてゐないのだ。

それ地震だとて飛び出さうとすれば、戸障子が動かなかつたり器物が散乱したり、家が倒れぬ迄も屋根

から瓦が落ちてくる。少し強いになると、立てもゐられず歩きもならず、無我夢中に這い出した処で思はぬ厄我(怪我)をする許りか、寒空に寝衣一つではたちまちに凍えて仕舞ふ。だから子供があつたり老人がゐたりする家庭に間違いが多いのだ。一体地震の度毎にこうした被害を受けるのは、我々お互の生活がそれに対して備へる処がなく、余りに複雑だからだと思ふ。原始時代のやうな最も簡単な生活ならそれ程に脅威を感じる筈はない。人間生活の向上が生活を複雑化した結果、地震の脅威を深刻化したのだ。即ち人間生活の向上が反面地震に対する脅威を増大せしめる結果となつたのだ。そこでもつともつと簡易な生活に還るならば、脅威も薄らぎ損害も軽く済む筈だが、それが中々左様簡単に参らぬ所に人生の悩みがある。所詮この複雑な生活も振り捨て得ず、いつ迄も地震の脅威に曝されながら生きてゆく。それが人間お互いの運命なのであろうが。

昭二〇・二・一一記

12) 『朝日新聞』(1945年2月12日付)は、時間にずれはあるが「十日夜九時半、同十一時・・・B29各一機が関東地区に來襲した」と報じている。

豊橋地方空襲日誌 三

これまで中部軍管区東地区と呼ばれて来たこの地方は、けふ紀元節のよき日、新たに設けられた東海軍管区に入り、東海道地区と呼ばれることとなった。その区域は静岡富士川以西、愛知、岐阜、三重南牟婁郡を除く四県下だといふ。

一方、敵の我が地方に対する空襲は、昨年十一月二十三日を第一回として一月十一日までの五十日間に丁度五十回、更に二月十日までの八十日間に八十回に達した。そこでこの日誌も五十回までを第一冊とし、第二冊を八十回までで打ち切り、今日軍管区の改正を機会に第三冊として記録してゆかふと思ふ。思ふに、この地方として已に八十回に亘る警報の発令を見たに不拘、実際市内に投弾されたのは一月九日の僅か一回で、他は市の周辺に一二回焼夷弾を見舞はれた程度で、被害といってもこれを他の都市に較べて同日に論ずべくもない。然しいつまでもこの程度で怯む筈もないから、いつかは万丈の波乱がここにも襲いかかる時であらう。その覚悟をもってここに第三冊目の筆をとる。

昭和二十年二月十一日 豊田珍彦
時年六十有四

(新聞切抜き①『中日本新聞』1945年2月11日付)
東海軍力強く発足 先制民防の備へ 油断すな 西からの侵入

新軍管区の実施に伴ひ東海四県(愛知、岐阜、静岡、三重)及び北陸二県(石川、富山)を軍管区に包含する東海軍管区は司令官岡田資中將の下、参謀長藤村益蔵少將以下軍司令部の陣容と施設一切整へて十一日午前零時を期し力強く発足、管内軍官民を率ゐて敵機に挑む生産防衛の陣頭に立ち上がり即時警報の発令解除、軍情報の発表など防衛の完璧を期することになった。関係地域民は東海軍情報放送要図を参照、軍発令の警報に即応、軍情報に基き敵機の行動企図に関し迅速適切なる判断を下し飽まで不屈必勝の防衛活動を展開すべきであるが、屢次の戦訓を活かし“先制敵弾に挑む決意が特に大切である”と軍司令部の活動開始に先だち田村海軍防空主任参

謀は十日次の談話を発表、一般の奮起を要望した(以下略)



第30図：東海軍情報放送要図

【解説】日誌は、第二冊目の来襲回数が30回となったこと、2月11日をもって軍管区改正により東海軍管区が生まれたことを契機として第三冊目に入った。第三冊目は、冒頭、開始にあたっての所感と、2月11日に東海軍管区が新発足したことを伝える新聞記事の切り抜きで始まる¹³⁾。同記事は改正の理由を「管内軍官民を率ゐて敵機に挑む生産防衛の陣頭に立ち上がり即時警報の発令解除、軍情報の発表など防衛の完璧を期する」ためと記している。

空襲日誌 第三冊

二月十一日

(81) 大寒は三日に明けたが寒さに余り変わりのない午後九時。東海軍管区となって初の警戒警報が発令された。もうとくに寝てゐたが、はね起き、戸外に出て合図の太鼓をうつ。東の方で一二軒灯火の見える家があるのでどなり散らすとやうやう消した。風に吹かれながらラジオを聞いてゐたが、どうしたことか一向情報が入らない。全てが暗中模索だ。そのうちに西の方から爆音が聞へ頭上に迫るけはいに待避をうちだしたので早速太鼓を打って合図する。所が爆音はそれっ切り闇に消へて敵機は何方にか去つたらしい。暫く耳を傾けてゐたが聞ゆるものは松籟

13) その他の切抜きが数点あるが省略する。

ばかり。かくて九時三十分警報は解除になってあっけなく済んでまづよかった。

侵入一機 名古屋付近に若干投弾

(82) 再び寝についてまだ眠るまもない午後十一時またまた警戒警報のサイレンが鳴り出した。早速おき出て合図の太鼓をうつ。

どうした事か一向東海軍の情報がない。中部軍の情報で滋賀県を東進とあり。まもなくやってくるものと待機してみると、案に違はず西の方から例の爆音が聞へ出し、愈々近づいて来たので待避を知らせをうつ。耳をそばだててみると敵は一機で真上やや南よりを東南に向つてゆく。どこにも投弾した模様はない。やがて爆音はあなたの空に消え、十一時三十分警報は解除。折角暖まりかけた体がまたもとの様に冷へ切った。

侵入一機 名古屋附近に若干投弾

[解説] 2月11日、新たに誕生した東海軍管区による初めての警戒警報が21時に発令された。日誌の筆者は、合図の太鼓を打って知らせて回る。

ついでに灯火を消さない家に消灯するよう怒鳴り散らした。やがて爆音が聞こえ待避の太鼓に切替えたが30分で警報解除。その後、23時に再び警戒警報が発令されたが、これも30分で警報解除となった。

この2機は第20表のWSM190とWSM191であろう。WSM190とその後のいくつかの作戦については、米軍資料(「作戦要約」)からは帰還時間しかわからないものがある。その場合には、出撃時間と帰還時間の両方わかるものについてその差を計算して平均的往復時間を出しておおよその出撃時間を推定した。平均往復時間は、13時間から14時間と考えてよい。そこで第20表ではWSM190の帰還時間120323Kから14時間をマイナスしておおよその出撃時間を割り出してみた。その結果が(111423K)である。あとはこれまでやってきたようにマリアナ時間(K時)から1時間をマイナスして日本時間を出し、往路に要する平均的時間として7時間を加えて日本到着予想時間を出してある。出撃時間のわからないものについては以下、同様の操作をした。

第20表：2月11～14日の気象観測爆撃作戦と写真偵察任務

月日	作戦	出撃時間 (K時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時間 (日本時)	帰還時間 (K時)	目標 (地域)
2月11日	WSM189 3PRM44 WSM190 WSM191	101940K (110435K) (111323K) 111635K	101840 [110335] [111223] 111535	110140 {111035} {111923} 112235	110927K 111835K 120323K 120545K	太田新工場 太田 名古屋 名古屋
2月12日	WSM192 3PRM45 WSM193 WSM194	111846K (120320K) (121215K) 121738K	111746 [120220] [121115] 121638	120046 {120920} {121815} 122338	120845K 121720K 130215K 130725K	名古屋 太田 東京 東京
2月13日	WSM195 WSM196 WSM197	122004K (131231K) 131716K	121904 [131131] 131616	0130204 {131831} 132316	? 140231K 140410K	大阪 名古屋 大阪
2月14日	WSM198 3PRM46 73PRM3 73PRM4 WSM199	132031K 140204K (140223K) (140322K) (141226K)	131931 140104 [140123] [140222] [141126]	140231 140804 {140823} {140922} {141826}	140410K (行方不明) 141623K 141722K 150226K	東京 名古屋 東京他 東京他 大阪

注：()内の時間は帰還時間から逆算(14時間マイナス)した推定の出撃時間(K時)。

[]内の時間は推定出撃時間(K時)を日本時間に換算(1時間マイナス)。

{ }内は[]内の時間に日本までの平均的飛行時間(7時間)をプラスした時間。

(出所)「作戦要約」より作成。

なお、『朝日新聞』（1945年2月12～13日）は、「十一日午前二時過ぎ」に関東地区に来襲（WSM189）、「十一日午前十一時頃相模湾方面よりB29一機が侵入、国府津、関東南部および京浜地区を偵察」（3PRM44）「十一日午後八時三十分過ぎ、同十一時ごろ」各1機名古屋付近に来襲（WSM190、WSM191）、若干の投弾があったと報じている¹⁴⁾。

二月十二日

(83) 諺に二度あることは三度あるといふ。今夜已に二度来たのだからまだ一度位ひくのかも知れぬ。そんな話をして寝た眠り端の午前一時半警戒警報のサイレンが鳴り出した。すぐ起きてで合図の太鼓をうつ。今度も中部軍の情報で滋賀県より東進、東海軍管区に侵入した模様であったので、又かと待ち構へてみると西から聞へて来たのが例の爆音。近づくに従って頭上に迫らしい気配に待避の合図をうつ。やはり敵は一機で真上を通過して東南に向ってゆくらしい。幸にどこにも投弾した模様もなくやがて闇の彼方に消える。こうして二時丁度警報は解除。焚火に暖をとりながらこれを誌す。

尚、東海軍から三度ともラジオによる情報の発表がない。開始早々で御膳立の揃はぬのか、その必要なしとしてか、何れにしてもこれまで中部軍時代のやうに親しみのある情報をききたいものだ。

侵入一機 名古屋付近に若干投弾

(84) 午後七時もうそろそろ寝やうとした途端、けたたましいサイレンが鳴り出した。すぐ外に出て合図の太鼓をうつ。例によって軍から情報の発表がないので、敵機の動静など全然知る由もなく、ただ耳をすましてみると、少し風はあるが空は晴れ星はきらめいて静かな夜だ。それ切物音ひとつしな。緊張すること十五分であっけなく警報は解除となった。

不明 発表なし

【解説】12日に日付が変わって間もない01時30分に警戒警報が発令された。B-29は滋賀県から東海軍管区に侵入したと日誌は記したが、02時ちょうどに警報は解除となった。とはいえ、日誌は10日の夜の2回分と今回を合わせて3回分のラジオによる情報の発表がないとも述べている。12日の2度目の警戒警報は19時、「そろそろ寝やうとした途端」のことであった。ここでも「軍から情報の発表がないので敵機の動静など全然知る由」もないと述べている。

この2つの来襲はWSM192（名古屋）とWSM193（東京）と考えられる。米軍資料によれば、WSM192は名古屋に、WSM193は東京にそれぞれ2,000ポンド一般目的弾3発を投下した。『朝日新聞』（1945年2月13日付）は、12日午前1時30分の名古屋付近への来襲と「十二日午後七時過ぎ京浜地区に来襲したがまもなく南方洋上に脱去」を伝えている。この他にも「十二日朝十時頃関東地区に来襲したB29一機」（3PRM45）について報じている¹⁵⁾。

二月十三日

(85) 夜半ふと眼をさますとまたサイレンが鳴って居る。時計を見ると〇時十分過ぎだ。すぐおき出でて合図の太鼓をうつ。敵やいづこと大空をにらんで立てゐたが、薩張り分らない。こうなるとつくづく軍の情報の有難さを思ふ。寒風に曝されながら立つこと三十分で警報は解除され、何が何やら分らずに済んで仕舞った。

侵入一機 静岡附近に投弾

(86) 宵寝の自分はもうとくに床でめをさましてゐた午前三時。またまたサイレンが鳴り出した。うんざりしながらもそれでも起きいでて合図の太鼓を打つ。晩方から少し風邪気の処へ度々サイレンに起され、その上曉の冷い風に会つては寒くてやり切れぬ。

14) WSM189と3PRM44について原田良次（1973）は、「〇二〇〇よりB29一機御前崎より本土に侵入、甲府-秩父-熊谷を通過して土浦より洋上に去る」「一〇五〇ごろ沼津より侵入のB29一機甲府-大月をへて洋上に脱去」と記している。
15) 3PRM45は、日本の邀撃部隊によって銚子東方洋上で確実に撃墜と報道されたが、米軍資料によれば、12日17時20分にグアム基地に帰還している。なお、原田良次（1973）は「一〇〇〇B29一機小田原より大月-秩父を経て太田上空に侵入、九十九里浜より脱去。太田の偵察なり」と記している。

重ねた上へまた衣を重ね我慢してると、僅か十分許りで警報は解除になった。

こんな風だと何も知らぬ我々、果して敵機が来たのかと疑いたくなるも無理はない。それに我々は昨年以來、中部軍によつて訓練されて来て居るのに、東海軍区となつた昨日からすっかり調子が変わり頼りにする情報の発表もなし。勝手の違ふこと夥しく、ただまごまごする許りで、それに今夜のやうに僅か十分か十五分で解除になり爆音ひとつ聞くではなし。こんな事が続いたら防衛陣の士気にも関係しやう。困つたことだ。

侵入一機 大阪に投弾脱去

東海軍区になつてこの方警報発令中一度も情報の発表がなく、ただ暗中模索で民防の足並みが乱れさうだ。まさか軍のことだから準備の整はぬ為でもあるまいから、或はその必要を認められない結果かも知れぬ。

実をいふと民衆はもう馴つこになつて、夜間一機や二機の侵入には落付いたもので寝たまま情報をきき、いよいよ敵機が近づきさうになるまでは中々起きよふとしない。ましてその都度用水の氷を割つて置くといふやうな心がけの人が段々少なくなつて来た。これでは或は情報のない方が却てよいかも知れぬとも考へて見た。これまでは今日の新聞を見ると、第一面の初めから東海軍として甚だ懇切な情報が発表されつつあるのだといふ。デハ何故それが聞へないのか。恐らく波長が違つて聞く方がそれに合せられない結果であらう。折角の情報だ。何とかして見る必要を痛感する。

(87) 午後七時中部軍管区に敵機進入の情報があつたのでラジオのダイヤルを色々廻してゐる内に出た出た。

東海軍管区の情報が出た。

中部軍管区に敵機の侵入を見たからこちらへくるかも知れぬ故、水なり器具なり整備し灯火を嚴重にせよ、との親切な情報に続いて警戒警報の発令だ。敵機は案の如く鈴鹿を超へて三重県を横ざり名古屋、瀬戸を経て東南に向つてゐるといふ。今か今かと待つてゐると遙か北方鳳来寺山附近を東進、静岡県に入った

とて警報は解除された。其後敵は御前崎附近から洋上に出て南方に脱去したといふ。こんな風に今迄以上丁寧に懇切に発表される情報を聞きもせず色々批評などして甚だ申訳次第もない。謹んで前六回に亘り関係の記事を取消し。ここに御詫びを申上げて置く。

侵入一機 名古屋附近に 投弾脱去

〔解説〕13日は00時10分過ぎに警戒警報が発令されたが、警報は30分で解除になった。03時に再び警報が発令され。「うんざりしながらもそれでも起きいでて合図の太鼓を打つ」が、これもわずか十分で解除となった。

しかし、日誌の筆者は東海軍管区になってからそれまでと違って警戒警報発令中にラジオからの情報の発表がないことに不安を隠せないようである。「勝手の違ふこと夥しくただまごまごする許り」と訴えている。ただ、その後「今日の新聞を見ると第一面の初めから東海軍として甚だ懇切な情報が発表されつつある」というので、漸く軍管区情報放送の周波数が変わった可能性に気づいた。

19時に中部軍管区へのB-29の侵入に続いて、この日3度目の警戒警報が発令された。今度は「ラジオのダイヤルを色々廻してゐる内に出た出た。東海軍管区の情報が出た。」と喜びを伝えている。この敵機は鈴鹿-名古屋-鳳来寺山付近を経て御前崎付近から洋上へ飛び去つたようである。

真夜中の2機は、WSM194(東京)とWSM195(大阪)、19時の1機はWSM196(名古屋)であろう。米軍資料によれば、WSM194は東京ではなく鎌倉市に、WSM195は大阪に、WSM196は名古屋にそれぞれ2,000ポンド一般目的弾3発を投下した。なお、WSM197は大阪に向けて出撃したが機械故障のため目標に到達せず早期に帰還した。

『朝日新聞』(1945年2月14~15日付)は「十三日午前零時半ごろ静岡附近、三時ごろ大阪にB29各一機が来襲爆弾を投下」「十三日午後八時頃名古屋附近に来襲…若干の爆弾を投下」と報じた¹⁶⁾。

16) 豊西村空襲記録(1944-45)は、12日23時53分警戒警報発令、13日00時40分同解除「遠州灘ヨリ浜松、豊橋、秋葉山ヲ瀬戸、秋葉山上ヨリ御前岬南方ヲ海上脱去」、19時47分警戒警報発令、20時47分同解除「潮岬ヨリ浜松、浜名湖上空ヲ秋葉山、静岡投弾後伊豆へ脱去」の2回を記録している。

二月十四日

(88) 午前三時夜の静寂を破ってまたサイレンが鳴り出した。少し前用便に起きた許りでまだ眠らないでゐたので。すぐ起きいでて合図の太鼓をうつ。星明りの風もない静かな暁。寒さもゆふべ程でないことは用水に張った氷の思ひの外薄いことでも分る。情報によると浜名湖をめざしてやって来たが。接岸すると西して名古屋を衝かうか、東して帝都を襲はうかと、思案の旋回をつづけてゐたが。そのうちに針路を東北にとり、東部軍管区さして飛び去つたので、僅か二十分で警報は解除されたが、刻々の情報は的確であり親切であり、これなら中部軍時代よりどれ程よいか分らぬ。有難いことだ。

侵入一機 帝都附近に投弾後脱出

○情報

ゆふべ初めて東海軍の情報をきいてその発令期間の短いことが了解され、一層信頼の度を高めたことだった。

それはこれまで中部軍時代、静岡県の一部や岐阜県と一所に東地区と呼ばれ、特に指定のない限り警報も一所で同一の扱いだつた。然るに東海軍区となつて無用の心配と手数をかけまいとする軍の親切から、たとへば、昨夜のやうに四国沖に阪神をめざす敵があると、先づ情報でこれを予報し一般の注意を求め、更に東進の様子を察して三重、愛知両県に警報を出し、敵が名古屋を経て東進するに從ひ静岡県に警報出して、三重県を解除し、静岡県に入ると愛知県を解除するといふやり方。従て警報の期間は敵機がその上空を通過する十分か十五分で、民衆に無用の緊張を与へまいとする親切がこもつてゐる。これ程までにする親切な情報を聞き損じ、彼此れ批評などしたことは顧みて我ながら恥ずかしい限りだ。

○もう一つ

隣保班長でもない自分が用心のくせに警報の出る度に起きいでては合図太鼓をうつ。それは如何にも老人の冷水のやうだが、それには次のやうな理由がある。組長は隣保班長を補佐して組の防衛に当る。これが町の定めだ。その隣保班長正副二人とも昼間は大方不在だ。従て外に男気のないこの組では、自分が留

守を預りその代理をつとめねばならぬことになる。

過日、相原氏から組の警報用にと大小二つの太鼓を寄贈された。そこで携帯用の小さい方を当番用とし、大きな方を班長に預つて貰ふつもりだつた。処が班長は昼間用として自分に預れといはれるので其の意に従つた。それ以来、組のために忠実に実行して来たつもりだ。夜間空襲の場合は、当番が打ち廻るから自分はどうでもようやうなもの、手元にある太鼓ではあり起きた序だから奉仕の気持ちで打つて居る。実際夜中に二度三度と起きるのは老人としては大儀だが、この合図をうつということに張り合いを感じ、元気づけられることが頗る多い。そんな訳だから自分が元気である限り御節介でも何でもこれを続けさせて貰はふと思つて居る。打ち方は大体警防団がうつ半鐘と同じで外に組限り解除の打方もきめてある。すなわち

警戒警報発令	○ ○—○
空襲警報発令	○ ○—○—○—○—○
待 避	○ ○—○—○—○—○—○—○
空襲警報解除	○ ○—○
警戒警報解除	○ ○ ○ ○

○もう一つ

敵もさるものだ。来るたびに手をかへ品をかへ我をまごつかせやうとしてゐる。途中で旋回したり、爆音を消してみたり、もう已に経験済だが、投下弾についても、初めのころは大小焼夷弾の外、大方二百五十 K の爆弾だったが、その後焼夷弾と百 K 級の小形爆弾の混用となり、十二日夜名古屋へは千 K の大型を落していつたといふ。過日、飽海へ落したのは二百五十 K のものだらうといはれたが。それでも直径八九米 深さ四五米の大穴を明けた。新聞によると千 K 爆弾と思はれるものの、炸裂した後は少くもその数倍に達する直径十数米深さ十米にも達する穴になつてゐるといふ。やがては一噸爆弾をやけに落す時がくるかも知れぬ。

こうなると損害を最小限に喰止めるには、分散待避するより途はない。指導者はよくよく落下音に注意し、隣機の処置をとる必要が痛感されて来た。

(89) 午前九時町内会長を訪問し用談してあつたとき、その十五分頃突如警戒警報のサイレンが鳴り出したので早々に辞去。帰途大空を見上げると真上に近く飛行雲が流れてゐる。敵機は已に侵入してゐるのだ。大いそぎで帰り早速合図の太鼓をうつ。情報によると敵一機は浜名湖附近から侵入し鳳来寺附近を西北進中で尚それに続く一機ありといふ。その第一機の曳いた雲らしいが鳳来寺^{どころ}処か市の真上を僅かに東に寄つてゐるやうに見へる。続く一機も同じコースをゆくらしいがここからは見へない。暫くすると鳥羽方面から侵入せんとする一機があるともいふ。こやつも転じて浜名湖方面から侵入。薄雲りの空にも鮮やかな飛行雲を曳いて真上をさしてやつて来た。早速待避の合図をする。これも僅かに東にそれ名古屋めざして進んでいった。侵入したのは以上の三機でこやつらが巴^じ巴^ばと岡崎、足助、飯田、岐^い阜、下呂、関ヶ原、彦根などの上空に乱舞し^い弥が上にも人々を緊張させたがどこへ投弾した模様もなくいつのまにか脱去したと見へ十時二十分になつて警報の解除を見た。十日関東に来襲してから四日目。今日あたりひるから大挙してやつてくる先行偵察かとも思はれる。こころすべきことだ。

侵入三機 東海東部管内を偵察して脱去

(90) 午後八時眠り鼻を婆さんに起された。警戒警報のサイレンが盛んに鳴つている。すぐ起きいでて合図の太鼓をうつ。風もない静かな夜で寒さもこの頃より大分薄らいだ。情報によると四国沖から敵一機が侵入し、阪神を経て東進するかに見へたので警報の発令を見たが、途中方向をかへ志摩半島に出て、南方洋上に脱去したので僅か十分ばかりで警報は解除となつたのださうだ。

侵入一機 阪神に投弾 脱去

【解説】2月14日は3回の警戒警報が発令された。1回目は03時頃に発令、03時20分解除、2回目は09時15分頃発令、10時20分同解除、3

回目は20時頃発令、10分後に解除となつた。1回目と3回目は各1機、2回目は3機が来襲した。1機目は浜名湖付近から侵入し、進路を東北にとつた。2回目の来襲は、3機とも浜名湖付近から侵入、西北に進路をとつたように見えた。どこにも投弾したようすはなかつた。3回目は四国から侵入、阪神を経て東進したようである。日誌の筆者は、いずれの場合も太鼓を打つて警報発令を組内に知らせた。

03時頃の1機は、WSM198(東京)、09時から10時にかけての3機は、3PRM46(名古屋)、73PRM3(東京他)、73PRM4(東京他)、20時頃の1機はWSM199(大阪)と考えてよいだろう。米軍資料によれば、WSM198は東京に、WSM199は大阪にそれぞれ2,000ポンド一般目的弾を投下した。73PRM3~4は、敵機に遭遇せずに東京地域、横浜、大島などの写真を撮影した。3PRM46は途中で行方不明となつたが、場所、時間、状況などは報告されなかつた。

『朝日新聞』(1945年2月15~16日)は「十四日午前三時三十分頃帝都附近に来襲して若干の爆弾を投下した。さらに十四日午前十時過同じく各一機は二回に互り長野、関東北区を偵察」(WSM198, 73PRM3~4)「十四日午後八時ごろB29一機は四国方面から大阪市に侵入、爆弾を投下」(WSM199)と報じた¹⁷⁾。

なお、日誌は1回目と2回目の空襲警報の間に「情報」という見出しをつけて3点について説明している。第一は、警戒発令時の東海軍管区からのラジオ情報が、それ以前に比べて内容的に的確になつたことをあげている。例えば、「四国沖に阪神をめざす敵があると。まづ情報でこれを予報し、一般の注意を求め。更に東進の様子を察して三重、愛知両県に警報を出し、敵が名古屋を経て東進するに従ひ静岡県に警報出して、三重県を解除し、静岡県に入ると愛知県を解除するといふやり方」になつた。

17) 豊西村空襲記録(1944-45)は、2回目の来襲のようすを次のように記している。「三機、遠州灘、志摩半島及御前岬ヨリ上陸…」、また原田良次(1973)は、「一〇〇〇ごろ…下田方向より、浜松-甲府-大月をへてB29一機東京へ、向島が爆撃された」とのみ記している。

第二は、警報発令後、太鼓を打って組内を回る理由と各種警報の出し方について。太鼓を打って組内を回るのは、当番だからでなく「隣保班長正副二人とも昼間は大方不在だ。従て外に男気のないこの組では自分が留守を預りその代理をつとめねばならぬことになる」という義務感からであった。「老人としては大儀だがこの合図をうつということに張り合いを感じ元気づけられることが頗る多」かった。

第三は、爆撃方法や爆弾の種類に対応した臨機の処置をとる必要について。とはいえ、できることと言えば「損害を最小限に食止めるには分散待避するより途はない」ということであろうか。

なお、冒頭で述べた硫黄島作戦に先立つ米軍の動向について『中部日本新聞』（1945年2月11日付）は、中部太平洋方面は「今週はロタ島に対するB29の頻襲が目立ち六日B29、F4U等廿数機、八日B29約六十機が来襲、ヤップ島にも連日的中小型機廿機内外が来襲、またトラック島には八日B29約廿機が来襲したが特に硫黄島に対する必要な侵襲が」目立つとし、また米機動部隊の「敵海上作戦の重点は次第に比島を離れつつあり警戒を要する。特に比島を基地とする敵の索敵線、支那大陸からの敵大型機、敵機動部隊三者の連携は逐次強化されるであろう」と報じた。いよいよ硫黄島作戦が展開されることになるがそれも含めた豊橋地方の空襲の状況については次号にゆずりたい。

つづく

(2016年6月30日脱稿)

文献

- ① Headquarter of XXI Bomber Command, 20th Air Force, Tactical Mission Report, Mission No.26 ~ 38 (これについては工藤洋三企画・制作(2009), XXI Bomber Command & 20 Air Force Tactical Mission Reports Mission No.26 to No.331を利用した。「作戦任務報告書」と訳されることが多い。大規模爆撃の記述は本資料による)。
- ② Headquarter of XXI Bomber Command, 20th Air Force, Narrative History, Documents 196-198, Operational Summary No.1 ~ No.54 (これについてはピースおおさかがアメリカのマックスウェル空軍基地の合衆国空軍歴史研究センターから収集した資料を利用した。本稿では「作戦要約」と記載)。
- ③ S.E. Morison(1960), *Victory in the Pacific 1945, History of United States Naval Operations in World War II*, Vol.14, Univ. of Illinois Press.
- ④ 工藤洋三(2011)『米軍の写真偵察と日本空襲—写真偵察機が記録した日本本土と空襲被害—』(自主出版)。
- ⑤ 小山仁示訳(1995)『米軍資料 日本空襲の全容—マリアナ基地B29部隊 東方出版。』
- ⑥ 原田良次(1973)『日本大空襲』(上・下)中公新書。
- ⑦ 防衛庁防衛研修所戦史室(1968)『戦史叢書 本土防空作戦』朝雲新聞社。
- ⑧ 石井勉(1988)『アメリカ海軍機動部隊』成山堂書店。
- ⑨ 名古屋空襲を記録する会(1985)『名古屋空襲誌・資料編』同会。
- ⑩ あいち・平和のための戦争展実行委員会(2015)『戦時下・愛知の諸記録2015』同会。
- ⑪ 浜松空襲・戦災を記録する会編(1973)『浜松大空襲』同会。
- ⑫ 豊西村空襲記録(1944-45)(豊西村警防団第四分団が記録した空襲の記録)。
- ⑬ 津の空襲を記録する会(1986)『三重の空襲時刻表』同会。
- ⑭ 阿部聖(2012)「浜松空襲に関する米軍資料『作戦任務報告書』——一九四五年二月の浜松空襲——」浜松史跡調査顕彰会『遠江』第35号。
- ⑮ 内務省(1943)『時局防空必携 昭和十八年改訂』各省・企画院防衛総司令部。
- ⑯ 『朝日新聞』『中部日本新聞』等の2月中の空襲記事、他参照。